

# 開発過程の可視化を可能にする三層五段階思考法

## —参加者主体の開発のためのモニタリングツール—

伊藤 ゆうこ

大学院生

広島大学大学院国際協力研究科

〒739-8529 東広島市鏡山1-5-1

### 1. はじめに

開発効果の発現には時間がかかり、その変化の過程を客観的に表すことは困難であると言われており、開発過程（プロセス）を重視する参加型開発においても同様のことが言える。しかし、ドナー機関側は納税者や出資者への説明責任を果たすために、プロジェクトの実施期間などの比較的短い限定された期間内に、可視化できる表面的な成果を求めざるを得ない<sup>(1)</sup>。そのため、本来参加型開発には自立発展性を伴う長期的な効果が期待されているにも関わらず、短期的、且つ数量的、表面的な成果を分析する評価・モニタリング指標が選ばれ、その結果、本来期待されている意識の変化とモニタリング指標との関係が不整合なまま参加型開発プロジェクトが実施されることにつながっている。多くの開発研究者がこういった状況を問題視し、意識の変化を伴う開発過程（プロセス）を重視する必要性を唱えているものの、限られた期間内における意識の変化を伴う参加型開発の効果を評価する手法は開発されていない。そのため、意識の変化を客観的に評価することができる汎用性のある評価手法が求められている。

一方、参加型開発の視点から戦後日本の生活改善運動<sup>(2)</sup>をみると、農村女性を対象にファシリテーターとして活動を行った生活改良普及員は、女性たちを主体とした参加型開発の長期的な効果を引き出すことを念頭において活動をしていた。そのため生活改良普及員は、普及技術<sup>(3)</sup>を適宜活用すること

によって生活技術<sup>(4)</sup>を効果的に伝え、農村生活の主体である女性たちが各人に合った生活の改善や地域の活性化を目的とした活動を継続して実践し、少しずつ拡大させていくことができるよう働きかけた。こういった活動を実践するための指導上の指針には、活動内容や参加者の様子から、参加者の変化をモニターし、対象者に適した自立発展を促す働きかけを行うマネジメントのための思考法として三層五段階思考法が用いられていた。

そこで本稿では、戦後日本の農村における生活改善、及び農業普及の事例分析によって開発された同思考法が、今日の参加型開発における開発過程（プロセス）の意識の変化を分析することが可能なモニタリングツールとして活用できるという仮説の下で、日本、及び開発援助プロジェクトの事例を当てはめて、プロセスを分析することによって、同思考法が汎用性のあるモニタリングツールになり得ることを明らかにする。

そのため、まず第2章で参加型開発におけるファシリテーターの役割を分析することにより、適切なモニタリングツールの必要性を述べる。その上で、戦後日本の生活改善運動で用いられた三層五段階思考法が参加型開発を適切にモニタリングする上で有用な考え方であることを明らかにし、同思考法を汎用性のあるモニタリングツールとするために同思考法の要素とプロセスを可視化できる3×5マトリックス構造表を作成する。次に第3章で戦後日本の農村で行われた生活改善グループの活動、また第4章で、

ケニアの参加型開発プロジェクトで行われた活動の分析を、それぞれ三層五段階思考法のマトリックス構造表を用いて試みることにより、ケニアで実施されたプロジェクトにおいても、同思考法を用いて参加者の言動を分析することができ、発展過程（プロセス）の参加者の意識の変化が可視化できるモニタリングツールとなり得ることを明らかにする。最後に第5章で、これらによって、参加型開発において三層五段階思考法をモニタリングツールとして取り入れた活動は表面的な変化と共に、意識の変化を伴う参加型となることを確認する。つまり参加者の言動をマトリックス構造表に当てはめて表示することにより、どのような過程を経て、発展しているかをモニタリングすることが可能となるツールとして、同思考法が利用可能であることを明らかにし、今後のモニタリングツールの在り方について提言する。

## 2. 参加型開発における評価法とモニタリングツールの必要性

### 2.1. 参加型開発におけるファシリテーターの役割とモニタリングツールの必要性

現場で活動するファシリテーターが参加者の主体性を尊重するためには、地理、経済、歴史、社会といった様々な視点から対象地域、及び対象者の状況を把握した上で、対象者の気持ちを引き出さなければいけない。しかし、住民の置かれている様々な環境を把握し、参加者が本音を話すようになるための時間を十分にとることができない場合は、参加者の本来のニーズには気づかないばかりか、①かえって住民の言動に振り回される、②本来導きたい方向との落差によって進むべき方向を見失う<sup>(5)</sup>、③期待する開発の方向にプロジェクトが向かわなくなってしまう、④活動を円滑に実施することができないなどの問題を抱えることになる場合もある。参加者が、単なる見た目よさや便利さに引きずられた欲求に基づいて意見を述べ<sup>(6)</sup>たり、参加者自身が自分の置かれている複雑な状況を把握しきれていなかったりするためである。

また、そもそもプロジェクト期間終了後、参加者による継続的な活動といった自立発展性が求められるために、参加型開発が促進されるようになったと

いう背景があるにも関わらず、ファシリテーターなどの外部者の働きかけがある間は、開発に係る活動が円滑に実施されていても、外部者の働きかけがなくなることで、活動が停止してしまったり、活動が始まる以前の状態に戻ったりしてしまうということが起こり得る。こういった状況の中で参加型での開発を進めるためには、ファシリテーターは参集した対象者に技術・知識を伝えるだけではなく、各参加者自身がファシリテーターの伝える技術を参加者自身それぞれの状況に照らし合わせて考え、学ぶことができるような意識の変化を伴う適切な働きかけを行う必要がある。

しかしながら、ファシリテーターが自らの役割を十分認識した上で、参加者の状況に合わせた働きかけや、参加者の主体性を重視した活動を行うことを試みても、実際に適切な働きかけを行うことは容易ではない。また、適切な働きかけを行うことができて、実施した会合の回数や、それらに参加した人数といった数量的に表すことのできる表面的な変化における結果を指標とすることで、参加型開発の成果として表現することになってしまっているのが現状で、ファシリテーターの活動を含めて参加型開発の活動プロセス、参加者の意識の変化を客観的に評価できる適切な手段はない。

こうした参加型開発の評価に対する問題は、開発研究者や評価研究者によって提起されているだけではなく、実際に評価にあたる評価者の中でも、現在の表面的な成果重視の手法では評価しきれない部分が多くあることをジレンマとして感じられており、適切にプロセス、参加者の意識の変化を評価することのできる手法が必要とされている。

また、表面的な成果重視の評価において成功したとされる活動であっても、次の活動を引き起こすことなく持続的な開発にはつながらない場合もあるため、次の活動を引き起こすことのできる活動にし、自立発展性を促すためにも、プロセス、参加者の意識の変化を分析し、評価することのできるモニタリングツールは必要である。

## 2.2. 生活改善運動で用いられた三層五段階思考法

### 2.2.1. 三層五段階思考法開発の経緯と考え方

三層五段階思考法は、戦後日本の生活改善運動の核となった協同農業普及事業<sup>(7)</sup>における生活改善普及事業の中で、「考える農民を育成する<sup>(8)</sup>」という考え方の下で生活改善運動普及指導用ツールとして利用された思考法である。同思考法は、普及事業の有識者として迎えられた教育学者梅根悟<sup>(9)</sup>を中心に組織された普及方法のスタディチームによって、生活改良普及員、及び農業改良普及員がそれぞれの現場で抱える問題を持ち寄り、分析し、「問題解決学習」の考え方に「実行する、考える、学ぶ」という日常生活における場面を三層の構造(表1)として加え、普及事業用に開発された。

生活改善普及事業ではこの思考法を用い、開発過程における参加者の行動の変化に着目するだけではなく、「考える」、自ら「学ぶ」という参加者の態度や姿勢、意識も重視することができるようになった結果、普及員が農村女性に継続的に働きかけることで、一方的に指導を行い、その参加者の反応や様子

に試行錯誤するのではなく、参加者の主体性を意識的に引き出すことが可能となった。

他方、問題解決学習には、「第一段階：漠然とした問題意識をもつ、第二段階：困難の正体をつきとめ、何が問題であるかをはっきりさせる、第三段階：解決策を思いつく、第四段階：思いつきのもつさまざまなかかれた意味内容を推論によってはっきりさせる、第五段階：思いつきを実験によって確かめてみる」(農山漁家生活改善研究会, 7-10)といった主体の科学的思考のすじ道の五段階があり、通常、熟考して物事を進めたり、問題を解決したりする場合には、無意識にこのような経過をたどっている。この五段階の科学的思考の経過をたどる中で、上述の三層を行ったり来たりしながら、段階を進めることによって、生活に対する思考が深められ、知識が生活に定着し、活かされるようになり、生活が深められていくと考えられた。

生活改良普及員は、この五段階と三層構造を組み合わせた三層五段階思考法の考え方に基づいて、参加者の状況を分析し、適切な計画を立て、指導を行っていた。その上で、「まるまる教えてしまうの

表1 考える生活の三層構造

層の区分	解 説
第1層：実行する 実生活の上で起こってくる又路的な問題場面である。“生活実践の場”の層である	農民は毎日のしごとをしている最中に、いろいろの考えてみる必要のある又路的事態に当面するであろう。しかし、しごとの場というものは、雨のこない内にこれだけの仕事を片づけておきたいとか、早くしなければ料理が夕食の時刻に間に合わないというようなさし迫った事情(目的緊迫性)があるために、ゆっくり立ち止まって考えるわけにはゆかない場合が多い。(だからもし、主婦が農作業と家事作業だけを朝から夕まで働いて、食べて寝るだけの生活をしているとしたら、主婦はゆっくり考える時間を持ち得ないし、考える農民にはなりがたい。)
第2層：考える 実践的目的活動と結びついた“反省的思考の場”として実際的問題解決学習の場である	ところが農民も、いくらかの余暇を持ちえた時、彼は実生活の中での思考では十分に追及しきれなかった問題をその余暇時間を使って、徹底的に後述の科学的思考のすじ道を経ながら追求することができる。
第3層：学ぶ 実践的目的活動に必要な理論的問題を、系統的に研究したり、学習したりする層である。“基礎的及び系統的学習の場”	実際的問題解決を科学的に厳密にやろうとする時、われわれはしばしば理論的問題解決思考の必要に迫られる。 例えば、昨年の味噌作りの失敗を思い出し、どうしたらよいだろうという問題を考えている主婦は、その思考のプロセスで、麹菌及び発酵そのものの生物学的理論について、いっそうよく知る必要に迫られる。そのことについて基礎的に学習する時間をつくり(第三層)、醸造学の先生や、味噌の専門家に来ていただいて、理論的問題の研究を徹底して取り組むようなことがある。

(出典) 農家農村生活問題研究会 (1986, 273), 層の区分について筆者加筆

でなしに、自分で考える余地を残しておいて、助け舟は出してもらったけれども、それでも結局は自分の力で考え出したのだという自信がもてるように」(農山漁家生活改善研究会, 14-5) 指導することが重要であるとされていたため、生活改良普及員は、各参加者から考えや思いを引き出し、自分たちの生活に意識をさせることを心がけて、働きかけを繰り返していた。

### 2.2.2. 分析ツールとしての三層五段階思考法

現在多くの参加型開発で利用されているPCM手法では目標や活動は掲げられていても時間軸の設定がないためにプロセスを評価することができない。また、参加者自身が「気づく」、「考える」という態度の変化は評価の対象からは外れている。しかし、普及員のためのマネジメントツールとして開発された三層五段階思考法は参加者の「気づく」、「考える」という態度を引き出すことを目的としており、予め時間軸を設定することができていなくても、通常の評価指標では見落とされてしまう参加者のこれ

らの態度を評価対象にすることによって、意識の変化における開発過程(プロセス)を、可視化することができるようになる。

つまり、参加者が実際に行動を起こす前の「気づく」、「考える」という内面の変化を記録することとなるため、これまで取り上げることができなかった活動の経過や参加者の意識をはじめとする細かい変化を評価することができるようになり、数量的に表現できる活動や、その活動結果の成否でだけで評価されることはなくなり、プロジェクト活動を客観的に分析することができるようになる。

そこで本稿では、普及員の指導指針であった三層五段階思考法を、参加型開発における汎用可能なモニタリングツールとして活用できるように、表2のとおり3×5マトリックス構造表上に同思考法の要素とプロセスを表示することを試みた。以下の第3章、第4章の各事例において、住民の活動を同マトリックス構造表に当てはめていくことで三層五段階思考法の有効性とモニタリングツールとしての利用可能性に関する分析を試みる。

表2 三層五段階思考法

	第一段階	第二段階	第三段階	第四段階	第五段階	
	漠然たる問題意識をもつ	問題を明確化する	仮説を立てる	理論的に考える	試行的、実験的に行動する	
第一層： 行動する 生活実践の場	生活をしていて気づく 問題を意識し気になり出す	記録をつけて実態を調べる	先進例を見る	様々な条件について考える	試しにやってみる	実行 ↑ → 納得
第二層： 考える 問題解決学習の場	誰かと話をしていて気づく 問題について考える	問題を明確化する	解決策になりそうないくつかの仮説を立てる	理論的に吟味する 実際に使えるか考える	問題があれば、仮説を立て直す	
第三層： 学ぶ 基礎学習の場	本を読んだり、講義を聞いたりして気づく	わからない部分について研究、勉強する	先進例の条件について学ぶ、調べる、研究する	仮説を立てられない部分について研究する 専門家の意見を聞く	工夫点、応用点について、研究する	

(出典) 農山漁村女性・生活活動支援協会1987を基に筆者作成<sup>(10)</sup>

3. 三層五段階思考法による事例分析 I  
(広島県の生活改善活動<sup>(11)</sup>)

3.1. 生活改善グループの家計簿記帳による活動概要<sup>(12)</sup>

広島県の生活改善グループの活動は、「農協婦人部、地域婦人会<sup>(13)</sup>で「家計簿をつけましょう」という運動が続けられ記入する人も多くなったけれど、大福帳にすぎなかったり、大晦日に年間の収支を見るだけの繰り返し」(瀬戸 1962, 57)であり、参加者が家計簿記帳が実生活に結びついていないことを気がかりに思い、単なる家計簿記帳に疑問を感じるようになったことをきっかけに始められた(表3)。

生活改善に関わる活動をグループで行う場合、他人の生活と比較して見栄を張るなどして、真実を隠してしまうことが考えられるが、真実を隠したままであると、改善のための適切な活動を行うことができず、継続した活動ができなくなる恐れがある。このグループが家計簿記帳に取り組む際も、他のメンバーに個人の家計、家族の状況がわかってしまい正しく記帳することを躊躇する人が出ることを考慮し、家計の一部である調味料の消費状況に注目することから始められた。

対象が、調味料の支出という家計の一部であったにも関わらず、参加者はグループ員と共に、記帳した記録を見直し、調味料の基準値と比較することによって、味付けに問題があるのではないかと、必要な

表3 食生活の見直しができるようになるまでの過程<sup>(14)</sup>

期間	援助した事項	普及員の目標	五段階思考
1959	1. 家計簿は何のためにつけるのか 2. 我々の生活の程度について	○生活を計画的にするための意欲の喚起 ○家計についての現状のあらましを知ってもらう。(記帳の程度、家計への関心の程度)	第一段階： 漠然とした問題意識を持つ
1960 61.3~	1. 家計についてグループではなしあえるための会合の持ち方 2. 調味料の記帳と検討 3. 購入食品費の集計と検討 4. 栄養必要量と食費の必要額について 5. エンゲル係数とその考え方 6. 食費の年間の予算とその計算について 7. 60年の年間の家計費を費目別に集計し、61年度のあり方を反省してみる。 8. 1年間の歩みをまとめ展示する。	○くらしの実態をつかむ(食費) ○くらしを科学的にする態度を身につける ○自分の家庭の生活の反省ができるようになる	第二段階： 問題を明確化する
61.4	1. 展示内容を印刷製本するための援助	○各家庭の主婦が理解し、自分の家計と結びつけて考えてくれることを期待して	第三段階： 仮説を立てる
61.7	2. 上記印刷物をテキストにして話し合い	○各自の生活の反省	
61.8	3. 家計費と所得とのつりあいについて 4. 各費目別予算の配分について	○各自の生活の反省	
61.9	5. 月別家計費を図表に表すことの援助	○家計費の実態をよりはっきり認識するために	
61.12	6. 61年の活動の反省	○家計の検討は何のためにするかがわかる	
62.1	1. 61年の家計費を費目別に集計してみる。	○60年と61年を比較してみる	第四段階： 理論的に考える
62.2	2. 61年の反省と今年の各自の目標について話し合い	○家計の検討ができるようになる。	第五段階： 試行的、実験的に行動する

(出典) 山根 1962, 66-7 (原文のまま、和暦を西暦に修正)、右列は五段階思考に当てはめ筆者加筆

栄養がとれていないのではないかという問題意識が生まれ、購入した食品内容、1日当たりの食費、食物の構成、年間の食費計算及び自給や購入計画作成へと取り上げる内容を発展させている。そして、料理方法に関する問題点の気づき、健康、病気への関心が高まり、栽培、将来の家計、教育費など家計だけではなく日常生活全般へと関心の範囲が広がっている。

### 3.2. 三層五段階思考法による事例分析

このグループの活動は、農協婦人部や地域婦人部によって地域全体に呼びかけられた家計簿記帳運動をきっかけに、自分の生活や自分たちの家計簿記帳法への疑問が寄せられたところから始まっている。メンバーが自分の生活や家計簿記帳という行為に漠然とした疑問を持ったことは三層五段階思考の第一段階とみなすことができる。そして、読書会の際に「『家計簿を記帳しただけでは、記帳の苦勞の半分もみのりがない』ことを反省」(瀬戸, 59)したことをきっかけに、同志が集まり、暮らしをよくするためのグループ活動が始められた。

活動を始めるにあたっては、生活改良普及員が調味料の記帳をはたらきかけている。グループ活動として家計簿記帳を実施すると、貧富の差がそのまま出てしまったり、平均的な家庭であってもそのまま家計を仲間に見せるのは抵抗があるところを、調味

料の消費という家計の一部に注目することによって、意欲を盛り上げており、思考の第二段階へとうまく導いている。また、調味料の実態調査から、一人当たりの調味料使用量を算出し、標準的な砂糖、油の量について学び、理想的な食事の必要性への気づきを促し、問題が明確になっている。

これを契機に、購入している食品の実態を調べ、一人当たりに必要な食費を算出、理想的な食料構成について学び、年間の家計における食費への換算、エンゲル係数、理想の家計費を算出し、さらには食事量、栄養、病人や家族の嗜好、収入や生産、買い物など、参加者の興味の範囲が次々に広がっている。

また、記帳によって、様々なことに気づき、献立への注意に発展した人もいる。様々なこととは、「1) おばあさんまかせの献立は醤油の使い方が多い、2) 砂糖の使い方が少ない、3) 油の使い方が少ない、4) 買い物が計画的でなかった、5) 購入食品に加工品の割合が多い、6) 薬代(置き薬)の多いことに気づいた人があった、7) 1度病気をすると貯えのほとんどがなくなる、8) 家計費の実態と食費の割合からだした所要家計費との比較から家計費の貧弱であったこと、9) 農業費にたくさん使った家計費が少なくなっている、10) 教育費がずいぶんいること、Bさんは家計費の40%が教育費である」(原文のまま)(瀬戸:60-1)といった項目が挙げられている。

表4 三層五段階による地域婦人会の家計簿記帳運動

	第一段階 漠然たる問題意識をもつ	第二段階 問題を明確化する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的、実験的に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる		家計について考える			家計簿をつける
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる		—————→			
第三層 基礎学習の場 聞いてみる					

これらの項目を見ると、ここから生活を向上させるための選択肢がいくつか考えられる。第三段階に相当すると考えられる活動も、普及員の示唆によって進められており、各活動の実施及び生活の反省をすることでメンバーの意識が高まっていると想像される。

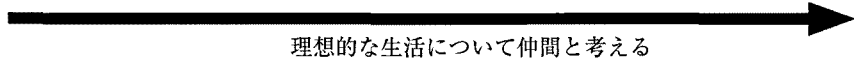
さらに、鶏の産卵率を計算し、家族の年間卵消費量と対比させるために、何羽必要か考える家庭、経営の改善や子供の成長を考えて梨の植え付けを開始、理想の家計のためにどうすればよいか家族で話し合うなど、思考が広がり、またグループで活動を行うことによって、アイデアを話しあったり、計画的な家族生活、理想的な家族生活への意欲が高まっており、第四段階の理論的な思考へとうまく導いている。

このグループの活動の場合、直接の目標は充実した家計簿の活用方法という一つの生活技術の修得であったものが、記帳活動を進めるに従って次第に食生活全体の見直しへと広がりを見せ、さらに長期的な家計管理につながり、生活全体に関する総合的な力を身につけていくことができたと考えられる。一

つの技術の一部分を身につけることによって成功体験が得られ、その積み重ねによって、視野が広がり、次々と別の課題に挑戦することができた例である。

地域婦人会の家計簿記帳運動と、その後の生活改善グループ<sup>(15)</sup>の活動を、それぞれ三層五段階思考法のマトリックス構造表上に記述すると、表4、表5の通りとなる。網羅組織である地域婦人会の家計簿記帳運動の場合<sup>(16)</sup>(表4)は、三層五段階思考法に基づく働きかけがなかったため、第一層の生活実践の場のみで呼びかけに応じて活動をしただけで、第二層、第三層への発展はなかったと考えられる。しかし、この活動を契機として、疑問を持つことによって始まった目的集団である生活改善グループの活動(表5)は三層五段階思考法に基づく生活改良普及員の働きかけもあり、それぞれの段階を経て活動が発展しただけではなく、活動について考え、また学ぶ機会を持ちながら発展した。そのことで、単なる記帳だけではなく、各参加者が家計について、自分で考え、問題意識を持ち、それぞれに合った方法による改善の実施につながった。

表5 三層五段階による家計簿グループの活動

	第一段階 漠然たる問題意識をもつ	第二段階 問題を明確化する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的、実験的に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる	家計簿を記帳する	調味料使用量、購入食品、食費、食事量、家族の嗜好等の調査をする	月別家計費を図表に表す	前年度との比較をする	家計の検討、年間計画の作成
 理想的な生活について仲間と考える					
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる	家計簿記帳の苦労ほどの実りがないのはなぜか考える	各家庭の調査結果を基に暮らしの実態を科学的に考える、理想の食事について考える	食品の実態、献立、支出(家計費、病院費、農業の経費)について考える	鶏の産卵率、家族の年間卵消費量等生産費と消費との対比について考える	生活全体について考える
第三層 基礎学習の場 聞いてみる	家計簿記帳の目的を学ぶ 計画的な生活について学ぶ	栄養必要量と食費、エンゲル係数食費の年間計画について学ぶ	家計の検討の必要性について学ぶ	計画的な家庭生活、理想的な家計管理について学ぶ	長期的な家計管理、生活全体について学ぶ

#### 4. 三層五段階思考法による事例分析Ⅱ (ケニアの参加型農村開発)

##### 4.1. ケニアバリngo県の生活環境改善実証事業<sup>(17)</sup> の活動概要

バリngo県半乾燥地域農村開発計画調査は、上位目標を「半乾燥地域の村人の生活が向上する」として1999年7月から2年8カ月にわたり実施され、そのうち2000年3月から1年9カ月の間に実証調査事業10件が9地区で行われた。これらの実証調査事業には、女性を対象とした事業として、「改良かまど導入による生活環境改善（調査対象地域全域）」、「小規模産業振興を通じた女性活動推進事業（カンピヤサマ

キ）」があり、改良かまど導入はエントリープログラムとして位置付けられ実施された。

この改良かまど導入事業は、参加型開発の考え方に基づいて実施され、また一般公開された日記形式の「改良かまど導入による生活改善」の記録（2000年4月6日から2001年2月25日の記録）（バリngo調査団2003：24-49）があることから分析対象として取り上げるのに適した事例であると判断し、記録の分析を行うと共に、普及員及び改良かまどを導入した家庭を2004年7月から9月に訪問し、聞き取り調査を実施した。

改良かまど普及のきっかけから製作までの流れは表6の通りである。

表6 改良かまど普及のきっかけから制作までの流れ

時期	活 動 等	
2000.4.6	きっかけ	ワークショップ参加者（後の女性グループリーダー）の発言 「改良かまどを導入して薪の量を減らせれば、薪拾いに費やす時間が節約できる。そうしたら、その時間を他の活動に割り振ることができる。」
2000.4.11	先進地スタディツアー	日本人調査団員による日本人専門家の紹介 改良かまど先進地へのスタディツアーの実施 日本人スタッフ、C/P*、部族ごとの女性代表4名が参加
2000.4.11	スタディツアーの内容	改良かまどの長所、短所、製作技術、改良かまど普及の目的についての説明 目的は、「汚染された水のため、乳幼児死亡率が高く、それをカバーするために女性がたくさんの子供を産んでいる。水を沸かして飲むようになれば乳幼児死亡率は低下し、子供の数も減る」という考えの下、家族計画のために改良かまどが普及した。普通、オープン付、煙突付改良かまどの見学
2000.4.11	男性の参加	ヴィヒガのかまど製作技術者は男性の関与を勧めたが、女性グループに却下された。
2000.4.18	スタディツアーの弊害	夫が、先に外の世界を見に行っただけで妻が気に入らなかったため 夫によって、参加者がしばらく自宅からの外出を禁止される
2000.4.13 -15	デモンストレーション	改良かまど先進地より技術者4名の派遣によるデモンストレーションの実施 普通サイズ、小さな台所用の製作の実演
	講義内容以外の長所	女性は普段から土壁の修理のために土をこねることに慣れている 材料費がかからない。形やサイズを自由に変えることができる
2000.7.19	火入れ式	改良かまど製作後、ひび割れの修理をしながら乾燥するのを2週間待つ 近隣から女性が集まり火を入れ、ウガリ、野菜炒め、ミルクティを調理し、ふるまう 学校の先生宅では、子供も火入れ式に招待。理科、家庭科の教育効果も期待できる。
2000.7.26	製作技術の習得	製作技術を身につけた人のうち、上手な人は自分でやってしまうため、立ち会った人たちの技術習得は困難。技術力不足の人が製作すると、がたがたと不安定、奥行き不足、土の粘性不足などによって土台から崩壊、もしくは作り直しとなった。



2000.9.6	モニタリングツアー参加者による改良カマド製作	改良カマド製作者の助けを借りず、近隣の人と協力して改良カマドを製作。薪の節約量は3/4のみであったが、食器棚が併設されており、カマド、壁に模様があったり、サイドボードの上の縁を高くして、モノが落ちないなど、いろいろな個所に工夫が見られた。
2000.9.7	改良カマド製作費用	改良カマド製作技術者が、JICAより製作費をもらっているという噂が出たため、指導に行くと、手当をもらっているのだから、全部やってくれと言われるということが起きた。改良カマド製作費ではなく、出張に対する日当であった。
	その他	改良カマドの設置を何軒かにすることによって、薪の入れ方、空気の通し方、火の調節等工夫が必要であることがわかった。キッチン内の改良カマドの場所も、煙が逃げやすいように窓の下に設置した方がよい、など工夫が必要であった。
	地域の環境	この地域は半乾燥地で、薪収集は特に困難であり、近年木が少なくなってきたため、多くの時間を薪収集に費やすようになっていた。そのため、改良カマドはローカル材料を用いて作成することができるとともに、薪の利用を1/3に減らすことができるので、改良カマドは生活改善、及び地域の環境保護にも重要な役割をもつ。

(出典) パリango調査団 (2003, 24-49) を基に筆者作成

注) C/P: カウンターパート

## 4.2. 三層五段階思考法による事例分析

### 4.2.1. 事業を提案した代表者に従った参加者の活動プロセス

改良カマド導入のきっかけは「利用によって、時間の節約ができる」というワークショップ参加者の発言からであった。その後、代表者による先進地への視察旅行、先進地の技術者によるデモンストレーション、各家庭への普及というように、他の参加者と共に会合に参加し、生活上の問題について考え、関連知識を学び、活動は発展し、少しずつ同地域に

改良カマドが普及した。製作までの経緯を三層五段階思考法のマトリックス構造表に記述すると表7のようになる。農村住民が会合に参加し生活上の問題について考え、関係する知識を学ぶなど、それぞれの段階を体験した結果、改良カマドが設置されており、参加型で同事業が実施されたことが確認できる。

しかし、改良カマドの性質について学ぶ段階では、自分の意思で学んだというより、製法や性質について教えられているため、知識として習得はしたものの、生活が深められたとは考えにくく、自分

表7 三層五段階による改良カマド設置までの流れ (事業を提案した代表者に従った参加者の活動)

	第一段階 漠然たる問題意識をもつ	第二段階 問題を明確化する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的、実験的に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる	普段の生活は時間の余裕がないことに気づく	改良カマドがよいと考える (代表者)	先進地に視察に行く (代表者4名)	デモンストレーションに参加する	製作してみる
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる					
第三層 基礎学習の場 聞いてみる			改良カマドの製法、性質について教えられる (代表者)	改良カマドの製法、性質について教えられる	

で考える機会は持たれないまま、教え込みによって活動が進められ、意識の変化は伴われなかったと推測される。

その場合、第二層、第三層への行き来がみられず、改良カマドが自宅に設置されたとしても、「気がついたら改良カマドが自分の家にもできていて、便利になっていた」となることが考えられる。

#### 4.2.2. 自分で製作し失敗した参加者の活動プロセス

先進地視察やデモンストレーションへの参加後、その後一人で改良カマド設置を試みた人が現れた。この場合は、表8のような段階を経たと考えられる。第四段階で自分で工夫してみるといった点は、第二層に及んだと考えられるが、第三段階、第四段階で自分に合った方法についてきちんと考えたり、学んだりせず、自分の思うまま製作してしまったため

に、残念ながら出来栄の悪い完成品へとつながってしまった。しかし、出来上がり品の成否に関わらず、参加者の主体的な言動に注目することを目的としてモニタリングを行う場合、「自分で製作した」ことは、部分的にはあるが意識の変化を伴っている点で評価すべきであると筆者は考える。

このわからないなりに作ってみようという意欲を大切に、失敗作について、技術者が間違っている点について指摘し、自分で作り方の工程をひとつずつ振り返り、第二段階、第三段階、あるいは第一段階から考え、学び直し、改めて作り直すことができれば、第二層、第三層へと深めることができる。ただ、失敗、不良品だからやり直しと、外部者が判断し、外部者主導で作り直してしまえば、第二層、第三層へと深められることはないままとなり、失敗経験だけが残ってしまうことも考えられる。

表8 三層五段階による改良カマド設置までの流れ（自分で製作し失敗した参加者の活動）

	第一段階 漠然たる問題意識をもつ	第二段階 問題を明確化する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的、実験的に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる		時間を作るために改良カマドがよいと聞く	デモンストレーションに参加する	製作してみる	アドバイスに従って改良カマドを修理する
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる				自分で工夫して作ってみる	
第三層 基礎学習の場 聞いてみる			改良カマドの製 作法、性能につ いて教えられる		

#### 4.2.3. 積極的に取り組んだ参加者の活動プロセス

同開発調査では、周辺地域住民に対して各実証モデルを見学することのできるモニタリングツアー<sup>(18)</sup>が実施された。モニタリングツアーの機会を得た参加者は、他プロジェクトの先進地視察や改良カマド製作デモンストレーションへの参加は出来なかったが、その中に、いろいろな実証モデルを見ることによって、「自分でできることは何か」考えながら、ツアーに参加した人がいた。各モデルについて説明を受けた時も教えられたのではなく、自ら学ぶこと

ができ、第一段階から第二層、第三層と深めていくことができていたと考えられる。

その後、同参加者は改良カマドを見ることで、これなら自分の生活の中の問題を解決することができると自分で考え、積極的にツアーに参加し、様々な情報を得ていたと考えられる。読み書きができないこと、すぐに自分で作ろうと思った時に技術者が近くにいなかったことから、結果的に熱効率の悪いものが出来あがったが、見学先で見えてきたものからさらに工夫し、食器棚の併設、好みの飾りつけが施さ

れたなど、自分たちの行動様式に合ったものが作られた。自分たちで工夫をして改良カマドを作った人たちの場合は、表9の段階を経て、意識の変化があったと考えられる。

同地域でのセミナーは、改良カマド設置後となり、理想的な熱効率にするためには、自作改良カマドを改修しなければならない家庭もあったが、自分たちで考えながら製作を行ったことは、成功体験となり、次に何か活動することになれば、主体性をもって取り組みやすい。

ただ、熱効率が期待される値より低いことを告げても、使い勝手のよさから自作改良カマドでよいという主張もあった。「小規模産業振興を通じた女性活動推進」活動の対象地域ではないため、元々の目的である「改良カマドを利用することによって、時間を生み出す」必要はなかったことも考えられるが、改良カマド設置の目的について、改めて考え直すなど第一段階、第二段階からやり直すことも検討される必要があったことも考えられる。

表9 三層五段階による改良カマド設置までの流れ（積極的に取り組んだ参加者の活動）

	第一段階 漠然たる問題意識をもつ	第二段階 問題を明確化する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的、実験的に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる	モニタリングツアーに参加する	新農法や改良カマドを見る	デモンストレーションに参加する	覚えている間に仲間と協力して製作してみる	アドバイスに従って改良カマドを修理する
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる	自分に何かできることがないか考える		改良カマドなら自分にもできそうだと考える	自分の台所にあったデザイン、形に工夫して作ってみる	どこがいけなかったか考える
第三層 基礎学習の場 聞いてみる	見学先でいろいろな説明を聞く	改良カマドの製作法、性能について教わる			改良カマドセミナーが開催される

4.2.4. 力不足の技術者の指導を受けた参加者の活動プロセス

改良カマド製作を普及する段階で、製作技術のすぐれた技術者は自分で作ってしまい、自らの技術が不十分な技術者が指導した場合、製作しても作り直さなければいけないという事態が起きた。参加型での実施であるため、参加者の主体性にまかせ、参加者らによって活動を進めることは重要であるが、ファシリテーターなどの外部者が見守り中の開発、普及であれば、一番すぐれた技術を持っている人には、その技術を広めるための方法を指導したり、技術が不十分な人は不十分なまま現場に送り出すのではなく、十分な技術を習得させるべき、もしくはそのように示唆する必要がある。

ファシリテーターに頼ることのない住民活動の実

施において、不十分な点を指摘し、支援することは、ファシリテーターの参加であり、参加する住民だけでは解決できない人間関係の調整や技術力向上の支援といった役割を積極的に果たすべきであると考えられる。

技術力の不足している技術者によるデモンストレーションに住民が参加した場合は、失敗作の改良カマド製作を見ることで活動が終わり、参加者を取り巻く環境や状況をはじめ、意欲、主体性など何の変化も起きないだけでなく、無駄な費用、労力の使用、不用品が残るだけである。その上、ファシリテーターなどの外部者や直接関わった製作者との信頼関係がきちんと構築されていない場合は、むしろ意欲を喪失してしまう可能性もあると考えられる。

表10 三層五段階による改良カマド設置までの流れ（力不足の技術者の指導を受けた参加者の活動）

	第一段階 漠然たる問題 意識をもつ	第二段階 問題を明確化 する	第三段階 仮説を立てる	第四段階 理論的に考える	第五段階 試行的, 実験的 に行動する
第一層 生活実践の場 やってみる		改良カマドの製作 法, 性質について 教えられる	デモンストレーシ ョンに参加する → 失敗作を見る		
第二層・ 問題解決学習の場 考えてみる					
第三層 基礎学習の場 聞いてみる					

## 5. 三層五段階思考法の活用による事例分析の まとめ

### 5.1. 参加型開発と三層五段階思考法を用いたファ シリテーターの働きかけ

#### 5.1.1. 活動プロセスの把握による意識の変化を伴 う参加型開発の実施

三層五段階思考法は、既に述べてきた通り、日本の生活改善運動の現場では主に普及員自身、もしくはワークショップ参加者の思考の整理に用いられたマネジメントのための手法であり、生活改良普及員は、参加者のおかれている環境や状況を把握した上で、長期、中期、短期間における導くべき目標を設定し、その中で同思考法を用いて、参加者の主体性を引き出しながら生活技術を伝えていた。

参加型開発を行う場合、対象者が参加し、実践するなど表面的な変化が起こることで満足してしまいがちであるが、どの段階でどういった参加の仕方を促したか、参加者の思考がきちんと段階を経ることができたか、また活動を通して、参加者自身が考えたり、学ぶことができ、意識の変化が伴っていたかということを確認することが重要である。また、働きかけ方を工夫するなど働きかける側であるファシリテーターの日常的なマネジメントツールとして用いることは参加者の主体性を引き出すことにつながり、参加型開発をより充実したものにし、継続性の

期待できる活動につなげることができる。

広島県の事例の場合、三層五段階思考法に基づかない地域婦人会の家計簿記帳運動の事例（表4）では、ただ単に家計簿を記帳することだけで発展がなかったが、三層五段階思考法を身に付けた生活改良普及員による働きかけのあった生活改善グループの家計簿記帳活動（表5）では、記帳による発展が生活に及ばないことを疑問に思うことから出発し、家計簿記帳の主な目的である家計管理にとどまらず、栄養、料理、病気治療費、農業経営、教育といった様々な問題をグループのメンバーが考え発展させている。このように思考の段階、及び層の行き来を分析することによって、家計簿記帳といった一つの活動が表面的な参加型開発ではなく、参加型の意識の変化を伴う活動であったことを確認することができる。

また、第二層、第三層の行き来を分析することで、これまで視覚化が困難とされていた部分の評価を可能にするため、評価時点での参加型開発の効果、つまり短期間であっても途中経過における参加者の意識を分析することができ、栄養、料理、病気治療費、農業経営、教育など、一見拡大し過ぎて取捨がつかなくなってしまうように見える参加者の考えや活動でさえも、根拠のあるものであることが明確になる。

### 5.1.2. 生活の具体的な変化による意欲の向上

参加型開発において、住民の意欲を向上させ、活動を継続させるためには、参加者自身が身近で具体的な変化を体験することが重要である。様々な講義や講演を聞く、ワークショップに参加するなどして、有用知識を得るだけでなく、工夫や変化を実際に自分の日常生活に取り込こんでその生活の変化を体験し、変化の価値を見出すことができなければ、表面的な変化がもたらす更なる変化につなげることは困難である。また、表面的変化の価値を体験することができれば、それらの体験から得られる喜びを知り、自分でもできるといった自信を持つことができる。こういった体験は、その変化以上の効果をもたらす、さらによい方向へ生活を変化させたいという気持ち呼び起こし、その事柄、物自体の性質について考え、在り方について考える機会にもなる。

日本の生活改善の場合、例えば第2代農水省生活改善課課長の矢口(1972, 15)は「かまど改善は一つの手段であり、この手段をかまど屋さんという業者が行っては意味が違ってくるのである。この時に農家家庭の個人、または家族が考え、行動をおこし、このことから人間の解放とか平等とか義務の遂行とか社会性、創造性への発展が一体的に進められることに意味があることは、普及活動のいろは、として御承知の通りである。このことの意味が理解されなければ、農繁期の保存食は瓶詰めを買えばよいし、台所改善は、設計に参加せずに人に委せればよいし、商品選択の指導と、テレビの料理教室をみてやれる人がやればよいということで話は終わってしまうはずである」と、具体的に表面的な変化の在り方について指摘している。

三層五段階思考法を活用していない広島地域婦人会の家計簿記帳運動の事例(表4)、ケニアの事業を提案した代表者に従った参加者の活動(表7)の場合、活動における変化の価値を参加者が体験することができなかったために、表面的な変化が手段ではなく目的となっていたことが予測される。つまり、広島県の地域婦人会の事例では家計簿を記帳するという表面的な変化自体が目的となってしまう、何のために家計簿の記帳を行うのかということが見失われていた。しかし、三層五段階思考法に基づいた生活改良普及員の働きかけのあった生活改善グ

ループの家計簿記帳活動(表5)のようにそれまで当たり前と思われていた家計簿を記帳するという前提を考え直し、疑問に思う作業から始めることで、生活に密着した活動が少しずつ始まり、活動による変化を体験することで意識の変化が起きている。自らが考え、変化を体験する時に得られる改善の思考、意識の変化は、三層五段階思考法を利用することによって、促しやすくすることができると言える。

また、ケニアの改良カマドの設置に積極的に取り組んだ参加者の活動(表9)の場合は、カマドの土台にするための大きな石を入手すること自体が困難であったが、苦勞して石を収集し、自分たちで改良カマドを製作したことで、表面的な変化を身をもって体験することができている。元々、意欲の高い人がおり、興味のある活動について実施する場合、ファシリテーターの働きかけがなくても、このような結果を得ることができることもあるが、こういった活動を続け、興味の範囲を拡大し、継続的な活動を実施するためには、やはり三層五段階思考法による働きかけが効果的であると考えられる。

### 5.2. 参加型開発における三層五段階思考法のモニタリングツールとしての利用可能性

三層五段階思考法は、参加者の成長状態を確認し、参加者が主体的に考え、自ら学ぶことを促す目的で開発されたことに着目し、途上国の参加型開発事業のモニタリングツールとしての同思考法の利用可能性について検討をした。ファシリテーターとして活動した生活改良普及員のためのマネジメント手法は、評価者をはじめとするすべての開発関係者にとって、モニタリングのための手法とするなど幅広く活用することが可能であると考えたためである。

そのため、モニタリングや評価時に活用することのできるツールとするために、普及事業で用いられていた思考法の各要素とプロセスを、表2の通り一枚の3×5マトリックス構造表として提示した。それぞれの段階を参加者自身が主体的に行い途中で経るべき段階をきちんと経ることができたか、またそれぞれの段階ごとに参加者が自分で考えたり学んだりすることができていたかという意識の変化と表面的な変化を一枚の表の上で一つずつ確認することがで

きるようにするために、マトリックス形式にしたものである。

分析事例のように、このマトリックス構造表に参加者の意識や行動の変化を段階、及び層ごとに当てはめると、参加者の意識の変化を伴う成長状態を確認し、分析することができることが明確になった。また、モニタリングツールとして利用する場合においても、開発の途中の段階で、様々な開発の方向に発展していることを確認し、さらに拡大させることが可能となる。積極的に取り組んだ参加者の活動(表9)のように開発効果の見られる参加者の活動は、結果的に三層五段階思考法に基づいた発展過程を経ている。このことからわかるように、他の参加者が自ら思考を深めることができない部分をファシリテーターの働きかけによって促し、主体的に取り組むことができるように促すことが可能となる。

また、それぞれの段階を経て、第四段階、第五段階まで進んだ場合でも、間違いや、それまで選択した方法より、より適切な手法、解決策に気づく場合もある。そういった場合には目標としていた時点で結果が出せない状況に陥ったとしても、第一段階、第二段階からやり直して思考をより深めていることを示すことも可能である。

参加型開発が促進されるようになった背景の一つに、プロジェクト実施に関わる対象者の主体性や発展過程が重視されるようになったことが挙げられるが、分析事例でも、広島的生活改善グループの活動は参加者のそれまでの地域婦人会の活動への疑問、ケニアの改良カマド製作は他のワークショップにおける参加者の発言をきっかけに活動が開始した。参加型での開発を進めるためには、これらのように参加者の意見をうまく引き出し、問題解決につながる活動へとつなげるために参加者の意識を変化させることが非常に重要である。

その後の参加者の言動をマトリックス構造表に当てはめて表示することにより、どのような過程を経て、発展しているかということモニタリングすることが可能になり、参加者の成長状態を確認し参加者への働きかけを可能とするモニタリングツールとなり得ることが明確となった。また、段階ごとの分析をすることで、プロジェクトの分析、特に効果や継続性といった側面からの評価がしやすくなり、効果的な活動を行いやすくなることも明らかになっ

た。モニタリングツールとして三層五段階思考法を活用すると、これまでの評価・モニタリング指標では評価できなかった意識の変化を成果としてとらえることを可能にし、意識の変化とモニタリング指標との関係に整合性をもたらすことができる。

### 5.3. 三層五段階思考法のモニタリングツールとしての限界

三層五段階思考法をモニタリングツールとして利用する場合、プロジェクト開始前の状態との比較や、あらかじめ設定した目標が必要ではないため、比較的簡単に利用することのできるツールであると考えられる。しかし、同思考法は用いる人の主観によって影響される部分が大きいため、個人的な指針としてではなく、プロジェクトなどでモニタリングや評価のための手法として用いる場合は、あらかじめ関係者間でマトリックス構造表に入る言葉について確認をしておく必要がある、もしくは到達目標だけ設定し、途中の段階については、現場で参加者と対峙するファシリテーター等の裁量に任せてしまう必要があると考えられる。

また、ファシリテーターが現場で、参加者をマネジメントするために利用する場合は、参加者の思考を深めることを目的とするため、原因、可能性などをいくつも考え熟考し、幾通りにも項目を挙げることになるが、現場で恒常的に事業に関わる立場にない開発関係者が、複数事業を効率的に監視するためのモニタリングツールとして利用することになると、マトリックス構造表の一マスに一項目入れることで満足してしまい、本来期待されていた思考を深める活動につながりにくくなることも考えられる。

本稿では、三層五段階思考法の一般的な参加型開発の適用を試み、分析しているが、問題解決学習的な指導方法が適用されることが比較的少ない農業等の技術普及に特化した開発の場合でも同思考法を利用することは可能である。一般的に、理論さえ学べば適切な方法へと参加者を比較的簡単に導くことができる場合は、同思考法を用いることにより、かえってファシリテーターの労力が増える可能性が考えられる。例えば、どのくらいの日照時間があれば開花するなどといった理論を教えた上で、日照時間を調整する方法を指導することは比較的簡単であ

り、わざわざ同思考法を用いて、参加者自らが適切な日照時間を自分で知るように、観察、記録をするなどの働きかけは、ファシリテーターにとっては、時間も労力もかかるため、避けられがちとなる。しかし、このような場合でも、畑の周囲の環境や気候によって、必要とされる日照時間は理論的な数値と必ずしも同様ではないため、参加者がそれぞれ自分の置かれている状況や環境について、考え、その都度最適な方法をとることのできるような働きかけすることは、長期的に考えると決して無駄な労力ではないと考える。

## 6. おわりに

モニタリングツールとして三層五段階思考法を活用すると、これまでの評価・モニタリング指標では評価できなかった意識の変化を成果としてとらえることを可能にし、また、意識の変化とモニタリング指標との関係に整合性をもたらすことができることが明確になった。自立発展性が求められる参加型開発ではこれまでの表面的な変化重視の評価手法や、またあらかじめ特定の状況を作っておかなければ評価が実施できない手法よりも、長期的な効果を損なわず、コミュニティで活動するファシリテーターにも日常的に活用することが可能なモニタリング手法を必要としている。

本稿で取り上げた三層五段階思考法は戦後日本の普及事業の中で、数多くの事例を分析することによって開発され、生活改善運動の現場で活用されてきた普及技術である。こういった普及技術を用いたわが国の開発経験は途上国に対する技術協力においても十分活用し得るものであると考えられる。

## 参考文献

- 伊藤ゆうこ (2004), 開発援助の現場で主体的「改善」意欲はどのように育まれるか—戦後日本とケニアの農村開発における改良カマド普及の取り組み方の比較を通して—, 広島大学大学院国際協力研究科修士論文
- (2009), 参加型開発におけるファシリテーターのモニタリングツール—生活改善運動で用いられた三層五段階思考法の活用—, 国際開発学会第10回春季大会論文集
- 板垣邦子 (1992), 『昭和戦前・戦中期の農村生活』, 三嶺書房
- 梅根悟 (1954), 『問題解決学習』, 誠文堂新光社
- 小川照子 (1978), ある生活改良普及員の記録, 『日本の農業—あすへの歩み—121』, 農政調査委員会
- 国際開発高等教育機構 (2003), PCM 開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント モニタリング・評価編
- (2004), PCM 開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント 参加型計画編
- 国際協力機構 (2006), 技術協力コンテンツ—生活改善アプローチによるコミュニティ開発—
- 佐藤寛 (2002), 戦後日本の農村開発経験 —日本型マルチセクターアプローチ—, 『国際開発研究』 11 (2), 5-24
- (2003), 参加型開発の「再検討」, 佐藤寛編, 『参加型開発の再検討』, アジア経済研究所, 3 - 36頁
- 瀬戸文子 (1962), 家計簿の研究から食生活のあり方を反省して, 広島県農地経済部農業改良課, 『生活改善資料 なかまのあゆみ—生活改善実行グループ活動実績集—』, 57-63
- デューイ, ジョン (1957), 『学校と社会』, 宮原誠一訳, 岩波書店
- 農家農村生活問題研究会 (1986), よりよいくらしの原点を求めて 農家農村生活便覧, 創造書房
- 農山漁村女性・生活活動支援協会 (1987), 『これからの普及活動をどうすすめるか』
- バリゴ調査団, 2003, 『住民参加型開発フロントライン』, 国際協力出版会
- 藤田伸子 (2008), 「ゴールフリー評価」の可能性, 湊直信, 藤田伸子編, 『開発援助評価とその課題』, FASID
- 堀家欣子 (2002), 『生活関係』 (普及基本問題検討 拡大委員会用メモ)
- 矢口光子 (1972), 農家生活と農村地域社会の意味, 『生活研究』 10号, (社) 農山漁家生活改善研究会
- 山田しずみ (1959), 水汲み労働から女性を解放した簡易水道, 日野勝子, 『広島県の農家生活』, 広島郷土選書 5, 37-40
- 山根郁子 (1962), 食生活の反省ができるようになるまでの過程, 広島県農地経済部農業改良課,

『生活改善資料 なかまのあゆみ—生活改善実行グループ活動実績集—』, 64-7

Alex Jacobs, Robyn Wilford (2007), Putting new approaches to NGO accountability into action

## 注

- (1) 経済成長を重視した開発から、社会開発、人間開発の重視へと移行し参加型開発が実施されるようになったものの、一般的にログフレーム(PDM)を用いた成果重視の手法による評価が実施されている。
- (2) 本稿では、第二次世界大戦終戦(1945年)から高度経済成長期の1965年までの20年間に、農林省の生活改善普及事業を核として行われた農村開発に関わる活動を総称して「生活改善運動」として論ずる。生活改善に関する事業は明治期から、文部省、内務省、農商務省などの省庁や民間でも行われていた。第二次世界大戦中の生活改善は「食糧増産、健民健兵という国策完遂のために必要とされ」(板垣1992, 281)、戦後の生活改善とは異なるものであった。また1915年頃、東京市(当時)で同名の「生活改善運動」が行われ、都市生活を欧風化し、机椅子での生活などが広められたが定着しなかった。
- (3) 「対象および課題の難易等により、その学習の実効を高めるためのいろいろな方法」(農山魚村女性・生活活動支援協会, 83)を指す。本稿では、普及技術のみならず、普及方法まで含めて普及技術と称している。
- (4) 衣食住、家庭管理、保育といった生活に関する具体的な技術のことを指す。
- (5) 広島県の生活改良普及員の記録に「客をむかえる時のごちそうを習いたいというのが多い。客は1ヵ月に1回あるかないかわからないのに、なぜ毎日働いている人の食べ物を考えないのか。」(小川, 45)とある。日本の農村開発でも、参加者の希望と普及員の導きたい方向とに落差があったことがわかる。
- (6) 「台所改善は他地区でもやっているからやろうじゃあないかといった気持からとり上げられていて、私たちの集落で必要度の高いものから深く考えられたものではなかった…」(山田, 37)と、いう生活改善グループのメンバーによる記録がある。このグループは既に、かまど改善、流し調理台の設置を行ったが、余り生活の変化が感じられず、自分たちの緊急課題

が別のところにあったことに気づいている。最初は見かけ、周囲の状況に影響された活動であったことがわかる。

- (7) 1948年8月に農林省を主幹とする国と県の協同の新しい事業として、「直接農民に接して農業または農民生活の改善に関する科学技術及び知識の普及指導にあたる」(農業改良助長法第14条2)と規定され、始められた。同事業において、農業改良普及事業及び生活改善普及事業が2本柱として実施された。
- (8) 生活改善事業の基本的な考え方で、2代目農業改良局長小倉(1951)が説いた。
- (9) 生活改善普及事業初期から「普及」について、生活改良普及員に対する研修(講義、通信教育、テキスト作成等)を行った。
- (10) 農山魚村女性・生活活動支援協会(17-27)を参考にし、筆者がマトリックス構造表を作成した。同表は、筆者が2005年JICA研修で講義を行った際に作成、配布しており、その後、JICA筑波のテキストにも掲載されている。
- (11) 生活改善運動の核となった協同農業普及事業の中で実施された生活改善グループの活動を指す。
- (12) 「なかまのあゆみ—生活改善実行グループ活動実績集—」(広島県農地経済部農業改良課 1964)に掲載されている。それまでに実施された農水省主催の農家生活改善実績発表大会で発表された原稿、及びその活動を担当し、支援した生活改良普及員の援助内容及び特記事項が併せて綴られている。1963年の場合、広島県内の生活改善実行グループ数は625、グループ員数は12,357名で、この中から県代表として選ばれた活動である。
- (13) 地域の婦人による伝統的な網羅組織である。本稿で取り上げている生活改善運動の目的集団による活動とは性格が異なるため、区別している。網羅組織による活動は、地域全体で半強制的な取り組み(例えば町内一斉清掃活動など)には適している。
- (14) 昭和37年(1962年)に行われた第10回農家生活改善実績発表大会(農林省主催)に広島県代表で発表した家計簿グループの活動、及び援助した生活改良普及員の記録である。この家計簿グループは昭和35年4月に発足、4-9人家族の世帯、30から52歳の農村女性13人から成る。主に米麦の単作地帯で、メンバーの家庭では0.9-2.2ヘクタールの田畑を持ち、山羊、牛、馬、ニワトリを飼育している家庭もある。



- <sup>(15)</sup> 地域婦人会員の一部の人によって、生活改善グループが結成されている。
- <sup>(16)</sup> 詳細な記述が掲載されていなかったため、記録文より「家計簿の記帳の仕方について習い、家計簿を記帳した」という活動であったと想定した。
- <sup>(17)</sup> JICA (Japan International Cooperation Agency) 現在の独立行政法人国際協力機構の開発調査で実施された。
- <sup>(18)</sup> 同調査では「住民が相互に学びあう機会を提供するためそれぞれの実証事業地区を相互に訪問するという拡大モニタリングツアーを実施した」。(バリント調査団, 41)

## Abstract

# **“Three-by-Five Process Method” for Visible Process Development: Monitoring Tool for the Independent Participants on Participatory Rural Development**

Yuko ITO

Graduate Student

Graduate School for International Development and Cooperation

Hiroshima University

1-5-1, Kagamiyama, Higashi- Hiroshima, 739-8529 Japan

Not only does it take a long time for the appearance of development effects in participatory rural development to become visible, but also to numerically record the change from these effects is not easy. On the other hand, taxpayers and investors demand quick and numerical results for accountability. Therefore, the current monitoring indicators fail to fully reflect the philosophy of participatory rural development.

Due to these constrains, the future potential for success is inaccurately recorded and long term expectancies have inconsistency regardless of the long term expectations. In these situations, the monitoring tools for which to quantize the participatory development effects are demanded.

This paper, focuses on viable ways in which to measure participants changing actions and ideals throughout participatory rural development projects. The Japanese three-by-five process method is a more appropriate monitoring tool, as Japan focuses on the importance of long term independent development. The facilitators work primarily with rural women, who self-manage a variety of activities.

Comparative analyzation of studies of both Japanese and Kenyan women’s groups active participation, clarifies the necessity of monitoring tools in participatory rural development. Currently unrecorded self-development is of great importance to long term development. The three-by-five process method assists the changing of ideals.